

『ガロと風景』

アトリエ兼住居として古い一軒家に住んでいた頃、徳重君から一枚の絵をもらった。彼が家に遊びに来た時に持ってきてくれたものだったと記憶している。水色の画面の中に幾つか穴の開いた白い人のようなキャラクターのようなものが描かれている絵だった。

今回の dot を中心とした展覧会に当時 dot のメンバーだった徳重君の作品も展示したいということになり、僕がもらった絵も出すことになった。彼の作品を出すことが決まってからは、単に作品を展示するだけではなく小さな形でも徳重君への気持ちを込めたいと考えるようになった。もはや僕の完全な独り善がりにはしかならないが、彼との共同展示として出品する絵から着想を得て作品を作ろうと決めた。

制作にあたってまず、彼に纏わるものや記憶をモチーフにして一つの風景を組み立てることにした。彼が何度か遊びに来た新しいアトリエのロフト部分の一角に、普段あまり読まないからと寝る前に読んでいたマンガ(セレクトの偏りもあると思うが「ヒストリエ」「チェーザレ」「へうげもの」といった歴史ものを好んで読んでいたような気がする)、国際芸術祭「あいち 2022」で会った時に最近読み返していると話していたフーコーの本とそのブックケース、お土産としてももらったガロというニワトリの置物を置いた。そしてこれらのモチーフを個別の単位に分けて、窓・天井照明・読書灯の三つの位置から色々な種類の光で照らした。

実際にモチーフが置かれている所とは異なる場所や様々な情景の画像を、色々な種類の光として扱いランダムにモチーフを照らす方法は、『ガロと風景』の丁度反対側に展示している『積み上げられた本』と同じやり方である。しかし、本作品においてはその他に徳重君の絵から受け取ったことも含まれている。

今回の展示に際して改めて彼の絵をじっくり眺めてみた。これまでは水色の背景の中に白いものがあったてその中に幾つかの穴が開いていると見ていたものが、実は白い何かが大き穴で、それを取り囲む水色の部分や白いものの中の水色の楕円は手前の景色ではないかという感じがしてきた。徳重君にとって穴は今回の展覧会のタイトルとして借りている言葉の中、そしておよそ 25 年前の dot での個展のタイトルでも使われているようにとても重要な何かだったのだろう。彼がなぜ穴にこだわりを持っていたのか、僕は聞いたことがないので分からない。ただもし目の前にある風景や世界に何らかの穴があるとするなら、そこではどれも穴になり得るということを絵を通して彼から教えられたように思う。『ガロと風景』では光のない状態を穴としてランダムな光のパターンの中に組み込んだ。

ギャラリーに隣接する建物の二階に展示している『ガロと 2つの時間』は、フィンランドに滞在した時に採取した光を使った作品で、日照時間が長い夏の光の部屋に、冬のとても短い陽の光に照らされた(あるいは照らされていない)ガロが置かれている。『ガロと風景』でのその場所を含む様々な場所の光の取り扱いとは対比的に、同じ場所での大きく異なる光を扱うためにフィンランドの二つの光を選んだのだが、徳重君の経歴を見返してみると 2003 年にフィンランドでのレジデンスに参加していたようである。今思えばフィンランドを訪問する際に彼から情報ももらったような気がする。案外モチーフ選び偶然ではなかったのかもしれない。

渡辺 豪